

高齢者向けネットシステムの開発と実践 ——インターネットでの交流による社会的活動および ウェルビーイングの促進効果の検討——

桂 瑠以*, 北原 靖子*

The Development and Practice of Online Systems for the Elderly —Examination of Social Activity and Wellbeing Promotion Effects through Online Interaction—

Rui KATSURA*, Yasuko KITAHARA*

1. はじめに

近年、ICTの普及に伴い、高齢者のインターネット(以下、ネット)利用が増加している。総務省によれば、2017年末での高齢期世代のネット利用率は、60代後半で67.9%、70代で46.7%と過半数にのぼり、スマートフォンを始めとしたモバイル機器の利用も増加している⁽¹⁾。その一方、高齢者は、情報機器の操作への苦手意識が高いことも報告されており⁽²⁾、ネットや情報機器の利用の難しさを感じていることがうかがえる。桂・杉山⁽³⁾では、高齢期世代は、パソコンでのネット利用に比べて、モバイル機器でのネット利用が少ないこと、モバイル機器での通話が多いほど、対人交流が増加し、心理的引きこもりが低減する可能性があるものの、対人交流に有効なツールであるSNSやコミュニティサイトの利用は活発ではないこと等が指摘されている。そのため、高齢者がスマートフォンなどで簡単に利用できるネットシステムを開発し、それにより、対人交流が促進され、精神的健康が高まるかを検討することは重要な課題と考えられる。

他方、超高齢化が進むなかで、高齢者の社会的・心理的孤立の問題が指摘されており、その予防に社会的活動が重要であることが指摘されている⁽⁴⁾。その一つとして、ネットの利用により、他者との交流が促進

され、精神的健康が高まる効果が指摘されている⁽⁵⁾。ただし、ネット利用の影響に関する先行研究は、若年層を対象とした研究がほとんどであり、高齢者のネット利用に関する知見は十分に蓄積されていない。そこで本研究では、高齢者向けネットシステムを開発し、本システムによる実践実験を行い、ネットでの交流を通じて、社会的活動および精神的健康が促進するかを検討する。具体的には、社会的活動として、ネットでの交流により、外出やオフラインでの社会的活動も増加する可能性が考えられる。そのため、オンラインおよびオフラインでの対人交流量、外出頻度を上げ、オンラインでの交流との関連を検討する。また、精神的健康としては、ウェルビーイングを取り上げる。ウェルビーイングは、主観的な幸福感や満足感を表す包括的な概念であり⁽⁶⁾、ウェルビーイングを維持し、促進することは、高齢期における精神的健康を向上させる上で重要と考えられる。ウェルビーイングの指標としては、QOL (Quality of Life)、主観的幸福感、孤独感の低さなどが多く用いられており、ネットでの交流により、孤独感が低下し、主観的幸福感およびQOLが向上する可能性が考えられるため、これらの関連を検討する。

* 川村学園女子大学文学部 (Faculty of Liberal Arts, Kawamura Gakuen Woman's University)

受付日: 2020年2月3日; 再受付日: 2020年5月26日; 採録日: 2020年6月25日